

ビッグデータが一人も取り残さない ぬくもりのある社会を創る

喜連川 優つれがわ まさひろ

(国立情報学研究所所長／東京大学生産技術研究所教授)



現在、社会が直面している問題は根源的に難しいものばかりである。簡単な課題は相当程度解きほぐされ、残っている課題は一筋縄ではない。エビデンスとなるデータを収集し丁寧に解析することにより糸口を見いだす以外に方法はない。学術においても、真理の解明をめざすビッグデータ基盤の重要性が強く認識されその構築が進められつつある。

市町村や医療・介護関連施設などが保有するデータを細かく解析すると、その地域の介護・医療の課題が浮き彫りになる。まさにITの専門家の出番である。たとえば、東京大学と医療経済研究機構が三重県の自治体等と連携して医療、介護データを解析している。すると津市や四日市市では市内で医療・介護サービスを賄えている一方で、南部に住む人びとはかなり遠くまでサービスを

受けに行っていることがわかった。ほかに、生活習慣病の地域特性、高額医療機器の利用動向、同じ疾病の治療費の違いなどさまざまなデータから、その地域の医療の実態が見えるようになりつつある。過去の経験知を基に課題解決策を考える前に、具体的に実態を把握することが第一歩だ。

ビッグデータを用いれば、施策の結果が「可観測（オプザイバル）」になることも大きなメリットだ。ある政策を実施したことでどう良くなったかがわかれば、「もっとやろう」と動機付けが回る。自治体などを中心に改革する雰囲気が出てくる。ただビッグデータの解析を自治体がすべてやるのは負担が大きすぎる。われわれのようなIT専門家がデータのプラットフォームをつくり、全国の自治体の担当者や地域の人びとはそれぞれの課題の解決に頭を使う。そうした仕組みをつくる必要がある。ここでポイントは、医療、行政とITの専門家が領域を超えて会話をし、一緒に考えていくことだ。

高齢者だけでなく障がい者への取り組みも重要だ。ビッグデータは、希少疾患でも力を発揮するように、一人も取り残さないロングテール解析を可能とする。真にぬくもりのある社会の構築に貢献したい。